

# 道徳教育について

大橋 賢一

## An Essay of Moral Education

Kenichi Ohashi

—

漱石はその作品の中で、近代知識人の自己中心性（エゴイズム）を剔抉して、その後期の三部作の掉尾『こころ』では、その自覚・反省の果てに主人公を自殺に追い込んでいる。これは実は大変深刻な事態であるが、一方、初期の漱石が余裕派と称されるほどに、いわば俳諧的脱俗的「非人情」の境に遊んだ趣がある。それが災いしてか、後期の人間追求にあたっても余裕派のそれとして、やや深刻味が減殺される恐れもなしとしない。それゆえ漱石前後期三部作の帰結というべきエゴイズムとその超克を暗示した「則天去私」の思想に対しても、そんなに深刻な解釈がなされていないようだ。一例として佐古純一郎『文学をどう読むか』の中、「近代日本文学と理論」章の文を挙げよう。「さいごには則天去私というような観念的な人生観のなかに自己からの逃避を試みなければならなかった漱石（後略）」

もちろんその前には佐古氏、漱石のその辺の消息を、「漱石自身はそこから「則天去私」という一種の宗教的な雰囲気の中に脱出を試みるわけであるが、わたくしたちは、このような漱石の誠実な倫理的探求を近代文学のなかに持つことができたことは大きな収穫であったと考えなければならない。」と、積極的評価を与えているのである。

考えてみれば、漱石の人間追求には近代日本でも稀れな真摯さを見るけれども、世界的に見ればまだまだ不完全な面あり、というところだろうか。まだまだその追求は観念的であり、現実の自己の生活から逃避したものと佐古氏はいう。しかし、その則天去私を具体的に作品化したのが未完の長編『明暗』、題名どおり人間の明と暗そのままに凝視して描かれて、確かに則天去私の姿勢が見られるとあってよい。ゆえに、これをもって観念的というのはややあたらないのではないかと思われる。あるいは人、則天の則が「則る、したがう」の意ゆえに、そこに消極的な姿勢を感じるのであろうか。あたかも自然主義の文学に、ありのままを写すのみの消極性を見るごとくに。さらに少し違った観点から見れば、漱石はすぐれた英文学者でもあったから、「人生の悲劇的材料を捉えながら、それを読んで、深い人生の苦悶の中に引入られることもなく、そのような悲劇的葛藤の心理的解釈を聞くような心持を感ずるのである。」という風な評<sup>①</sup>が出てくるのだ。そういわれれば確かにそういう客観的ないしは傍観者的な面なきにしもあらず。親友であった正岡子規の影響もあって俳句を詠んだけれども、そこに俳諧味すなわち傍観者的諷刺、皮肉性も混入していたろうし、出世作『吾輩は猫である』にしてからが、正に猫の眼から人間世界を眺めた、傍観者的諷刺的世界なのである。そして同時期の作とあってよい『草枕』では、「非人情」といって、煩わしい人間世界を暫し離れた東洋的脱俗境を描いているのである。従って漱石

文学に傍観者性を見ることは、正鵠を得ていないとも言えぬ。

しかし、そういう諸条件を差し引いて考えても、近代日本文学の倫理性は、たしかに漱石文学において一の輝きを見せていると言わねばならない。それは前引の佐古氏文、漱石の積極評価の辺にもよく示されていて、その項の締めくくりの箇所では、「漱石がその文学をつくる実践のなかで追及してきた人間の倫理的探求がわたくしたちに切実な問題を投げかけている（後略）」と述べられているとおりである。

ただ佐古氏はクリスチャンであるゆえか、「人間における個の自覚は、神の前での自己の認識をとおしてのほかに成り立ちようがないことを如実に物語っているといえないだろうか。」などとしているところ、やや普遍性に欠けるのであるまいか。なぜなら、無神論的立場をとる人もいようし、仏教のように無神論的に人間超越を図ろうとする立場もあるのだ。それをキリスト教的一神論しかないような立言は、やや穏当を欠くのではないかと思われる。つまりは一種のドグマ的匂いを感じるということだ。

さて漱石の倫理性を探って、いわば傍観者的な面を残しながらも、自我の追求とその超克——則天去私の道を示したことを確認した。そしてこれは、実は正統の追及であり超克の道であることも共に確認しておきたいと思う。

すなわちわれらの道は、「あるべき」理想を求めんがために、「あるべからざる」現状を常に否定する「反省」を須要とするのである。その意味で、自我意識の認識と追求が「反省」にあたり、(則天)去私が現状否定に正にあたるのである。

ゆえにわれらは、たしかに漱石のごとき倫理的追求と超克の道を持ったことに対し、近代日本の誇りとせねばならぬ。

注1 『国文学史総説』（藤村作）364頁

## 二

漱石の則天去私、天に則ることによって私を去る、という時のその則天とは、先述したように天に従う、天に任すというくらいの意だろう。それあるいは『論語』の孔子の述懐、「五十にして天命を知る」<sup>①</sup>につながるものであるかもしれぬ。また或いは「仏道をならふといふは、自己をならふ也。自己をならふといふは、自己をわするなり。自己をわするるといふは、万法に証せらるるなり。(後略)」という道元『正法眼蔵』中「現成公案」の文<sup>②</sup>、ことに「万法に証せらるる」に関わりあるかもしれぬのだ。ゆえに佐古氏のごとく、——佐古氏も真宗寺の生まれであるが、漱石晩年の銘であるこの「則天去私」を、観念的逃避と難じ去ってしまえぬものと思うがどうだろうか。

さてそうすると、その「証せらるる」と同趣とされる「自己をわする」とは、正に漱石の「私を去る」に相当する。そうすると、こんどは仏教の精華の一たる「現成公案」と関わってくるのである。しかもである。この公案文のはじめ、「仏道をならふといふは自己をならふ也。」が漱石初期の銘たる「自己本位」と重なってくるのをどう解釈すればいいか。そういえば漱石は、初期三部作の最終作「門」におい

て、主人公・宗助に対し、円覚寺の和尚から「父母未生以前の我」についての公案を与えられたとしている。これもまた、自己本位の自己と去私の私との相克と超克の消息を暗示していると言えぬか。

今それはともかくとして、去私は「忘自己」と重なりと見てよいことが知れた。さらに「現成公案」の「自己を忘る」は、仏教の中心思想というよりは中心の精神（の姿勢）たる「無我」の一表現たるは確かである。それは私の領解するところ、「縁起、相依、無我」として一連の思想となる。縁起・相依（相對）なるがゆえに無我。すべて相依、相成の関係にあるがゆえに、その一々は絶対的、実体的意味は持たない。しかるに現実の我々は、貪（欲望）瞋（怒り）をはじめとして様々な場面で自己を絶対視するからこそ、男女間のいざこざも起こり、怒りの末の喧嘩も起こる。延いては国家間の戦争も起こってくるのである。因みにいえば、あの有名な宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ」の詩<sup>③</sup>に出てくる「欲ハナク、決シテ瞋ラズ」は正に先述した「貪瞋」にあたるのであり、その瞋りや戦いが裁判沙汰になりがちゆえに、「ケンクワヤソショウガアレバツマラナイカラヤメロトイヒ」という詩句となって表れてくる。現今の訴訟ばやりの思潮につかっている我ら、やはり一たび反省の目を向けてもいいのではないか。かく宮沢賢治の文学は、仏教ことに法華経信仰と不可欠なるがゆえに、賢治自身「法華文学」と称している<sup>④</sup>ほどである。我らはこのことも心に銘ずるべきではないか。賢治を論ずるに仏教の「ぶ」にも触れず、従ってそこに横溢している道徳性、宗教性をも看過して恥じない。これは正に寒心の至りではないだろうか。

さてこうして見てくると、漱石の去私は我々にいろいろな流れの道を見せしむるのであるが、まずは仏教、無我と関わってくるだろう。そしてそれは暗に、道元「現成公案」の「自己を忘るる也」に通じもしよう。そして次に述ぶべきは、その忘自己は、同じ大乘の精華の一としての天台宗の教えの中、「忘己利他」<sup>⑤</sup>のそれと同趣であろうということ。更にその利他とは、大乘仏教の中心の実践たる「六度（六波羅蜜）」の第一「布施」に関わっていようということだ。すなわち「己を忘れて他を利す」これはこれ、現今の「奉仕（ボランティア）」にも相当するものと思う。たしかにわれわれ、奉仕することによって、ある程度自我意識を忘れてはらずで、ゆえにこそボランティアも学校の履修科目の一たるのだろう。ただこれも後述しようと思うが、それだけで自我意識がなくなるほど生易しくないことは、冒頭、漱石の『こころ』で主人公を自殺せしめたことで充分わかるはずである。とにかく、ボランティア活動も「去私≡無我」への一歩たることを言えば足りる。

かくて私は、実は道徳教育のありかをめぐって述べているわけで、漱石晩年の銘「則天去私」を一のキイ・ワードとして、自己反省の姿を考察していることになる。そして漱石のこの銘こそ、ことに仏教「無我」の法にも関わってくると思われるし、自己反省の姿勢を確かに示しているのであった。決して自己逃避でもないし、また観念的でもない。それは自己を真の理想に向けて向上させる基盤をなすものである。「吾日に三たび吾身を省みる」<sup>⑥</sup>態の自己修養であり、「修身」であるともいえる。しかもこの反省こそ、自己修養（向上）と同義なのであった。いわく、「自己をならふといふは自己をわする也。」更にいえば、その自省（利他への反省）の一方法が利他奉仕（ボランティア）活動であることも確認したのであった。ここでもわれわれは、「あるべき」理想への向上のためには、「あるべからざる」現状の否定すなわち「反省」が必要なことを知るのである。

注 ①『論語』為政（第二）

- ②『日本思想大系12・道元上』36頁
- ③『手帳』(昭和6.11.3～6)
- ④『宗教詩人宮澤賢治』(丹治昭義)233頁
- ⑤『最澄・空海集』(渡辺照宏編)最澄「山家学生式」
- ⑥『論語』学而(第一)

### 三

私は幼い時から道徳という言葉はよく聞いていた。父が若い頃から道徳科学という修養団体に属していたからである。以来今まで、道徳というもの、道徳教育というものに関心を抱きつづけてきた。そして現今のような、企業モラルは言うに及ばず、父殺し、子殺し、というような重犯罪が世を騒がしている思潮を目にし耳にすると、やはり黙止し得ぬ心の衝動を覚えるのだ。ついでに言えば、実は幼時から道徳のみではない。キリスト教にも私は縁があった。叔母がキリスト教の牧師の所へ嫁いでいたからである。食前食後の祈りの時の雰囲気など今でも心の片隅に残っている。また、私の青春期の、いつ開くともわからなかった深い悩みの最中に、「ヨブ記」<sup>①</sup>はある意味では世界最大の文学だよ、と教えてくれた義理の叔父の言葉も心の一部に深く記銘されている。

しかし私にはそれのみではないのだ。これもまた父親の影響に違いないのだが、私は若い頃より今に至るまで仏教徒であることを忘れたことはないのだ。それも悩みの高校時代より、文学を通じて入った親鸞の教えからだった。やがてその師・法然に私淑、今では法然教学に釈尊教説を重ねて領解せしめられている。従ってといおうか、私はこれからの一期を「御法文徒」<sup>みのりふみと</sup>として生きてゆこうと思っている。即ち仏法<sup>ぶつぽう</sup>という普遍の教えに基づいた文章家の謂である。

さて以上のような履歴を持った私は、いうなら、道徳なき宗教、また宗教なき道徳は考えられないのである。あたかもそれは、「諸悪莫作、衆善奉行、自浄其意、是諸仏教」(諸の悪は作すこと莫<sup>な</sup>かれ。衆<sup>すべ</sup>ての善は奉り行なへ。自ら其の意を浄む。是れ諸仏の教へなり。) <sup>②</sup>という釈尊教に収斂すると言ってもいい。また同趣の意を「世(この世・現実)出世(この世を超越した仏の世界)道理違はぬことにて候ふ。」という法然の法語<sup>③</sup>に聞くのもよい。そしてこの場合の出世とは、先述した「無我(エゴを超克すること)」の世界と言うことも可能だろう。したがって今のこの「自浄其意」とは、勸善懲悪と同時にそこに潜む自我<sup>じご</sup>を無くして、眞実平等一如の世界へ向けて向上の一途を辿る「浄」化の過程と位置づけられるであろう。しかもその浄化は、各々の己れが心懸け修養するのであって、他の誰でもないのである。ここに、道徳ないし宗教は、各々の主体を抜いて考えられないことがわかってくる。ゆえにこそ先述の道元教では、「仏道を習ふとは自己<sup>じご</sup>を習ふこと」と規定されているのであった。

ちなみに言えば、その法語の一応の締めくくりとして、「万法に証せらるる」とあるその万法とは、科学的眞理が無数に証明されているごとく、人間に関する種々の眞理あることを示すであろう。ただこの場合、エゴの汚濁を拭い去った「純客観」的普遍性を指すのである。ゆえに諸法<sup>しよぽう</sup>と称されるのであった。われわれは主体的に、絶えず普遍的価値を追い求めていくのである。主体に潜む自我<sup>じご</sup>を不断に否定してゆきながら。

「汝の意志の格率が、常に同時に普遍的立法の原理に妥当するように行為せよ。」というカントの定言命法<sup>③</sup>も、主体と普遍のありかを示す点で、先述来の道元語とも通うものがあるように思う。このように、ことに道徳や宗教では、主体的姿勢が不可欠のものであった。にもかかわらず、そこの所が看過されているように思われてならない。その原因の一つは科学的探究が主観的要素を全く排除するところにあるのではないか。道徳学（倫理学）、宗教学などとして科学的に研究されることは当然としても、縷述しているように、道徳、宗教の現実としては、各々の主観（主体）を抜いてはあり得ないのである。科学的学問を抽象的原理の探究として、われわれは時々、現実の具体たる主体的認識や直観に戻るべきなのではないか。——主観性を恐れない学問。そういう領域もあり得ると思うものだ。

ということで、ここで試みに今日の新聞<sup>⑤</sup>を繙いてみよう。具体的現実の大概は、この一紙のうちに見てとれようというものである。

ちょうど北京オリンピックのさなかということで、五輪関係の記事が多いが、さっそく一面では、レスリング男子で松永が銀。お寺の次男坊で、仏像を間近に見て育ったおかげか、深沈としてポーカーフォイスで、どんなピンチに陥っても柳に風と受け流す、という。これ、立派に徳目たり得るはずである。（徳目とは、まさに立派に道徳目標であるとの謂である。）同じく一面の上、読者から募集した短い詩が載せられている。深海魚はなぜ光を求めて上へ上がってはこないのか。なぜ目を退化させてまで深海に棲み続けるのか、と作者は問う。そしてその答えとして、「欲を捨てよ」と論しているのであろうと考える。これもまた立派に徳目たり得ると思う。（作者の考える答えの他に、環境と生物の関係などもあてはめられるであろう。）次にいわゆる新聞の三面記事、ここには全国のあらゆる事件、事故の報告がなされているが、村上ファンドの村上被告が、「インサイダーではない。」と主張しているとの記事の下、小さなコラムの中には、高齢者の事故防止対策として、沈静効果のある線香があるとの紹介がなされている。さてこの沈静効果こそ、あらゆる事件、事故対策に必要なのではないか。それあればかなりの事件、事故が緩和されるのではあるまいか。そういえば前述、レスリングの松永選手は、帰省した際には必ず実家の阿弥陀如来像を拝むという。ここにも、自我を超克した果ての真の沈静と穏やかさ、とも目される徳目が看取できるのだと思う。

かくて僅か数例を見たに過ぎないけれど、毎日配達される新聞においても、いわば数十ほどの徳目に出会う筈である。そこには道徳的教材を主として、宗教的文学的、また生活的教材が雲集しているのである。さてこそ、これら現実の諸現象に無数の教材（方法）を見て取る精神の敏感さと、それを現実生活の行動に生かす意志力、行動力の強さが求められるのだった。

現今、学習力、老人力などやたらに「力」を求めたがるのも、そういう意志力、行動力の減退を反証するものなのだろう。しかしまたそういう風潮も、具体的な力のなさを反省しての正当な欲求とも言い得るのである。

注 ①『旧新約聖書』（日本聖書協会）

②『法句経』183頁

③『高僧名著全集・法然上人篇』「十二箇条問答」

④『実践理性批判』（カント）第一部第一篇第七節

⑤ 産経新聞（平成20年8月20日付朝刊）

## 四

現代はインターネットの時代。かつてない速さで必要な情報を伝えてくれるその利便。デスクに座ったまま、何の行動も要せずして事を為してくれる。しかしそこにも副作用や弊害はついて回ろう。今話題に上している道徳について言えば、全てあらゆる知識、情報の網にとらえられて、どんなに正しく真実な道理を指し示しても、無数にある情報の一としか感受できない。というより、正しさ崇高さを素直に求められない心性になっているといおうか。その一証として、「たてまえ」の意味がわからなくなっていることを挙げたい。たてまえは本音に劣るとして不当に貶せられているようだが、たてまえとは、前に建てる「目標」ではないのか。目標を抜いた向上などあり得ないと思うが如何。道徳の徳目を嫌うのもこの風潮と無関係ではないだろう。かくて崇高な正しさは地を払い、瑕瑾をあさる犬のようなシニシズム（犬儒主義）が横行する。

さて前章において私の自我を少しさげ出したわけだが、事ほど左様に「我」を修習、修養することを除いて、各々の向上はないはずである。即ち、「修身」。しかしまたこの徳目も不当に看過されている。その証は、今見るごとき無「法」というべき事態に全顕せられている。目標の普遍性が見失われたゆえである。それぞれの人々がそれぞれの心理を追求し把握する。それをこそ「万法」と称しているのであろう。「自己をわするとは万法に証せらるる也。」ただそれには、自己を忘れること即ち現状の自己を徹底して否定する真の自己反省を要するのである。ここでも、「あるべき」理想を求めるには、「あるべからざる」現状を不断に否定せねばならぬ、との図式が当てはまると思えるのだ。

先に私はそれぞれの心理の普遍性と言ったが、まず第一に想起されるのは、いわゆる自然科学上の真理、公理である。（ニュートンの万有引力の真理、アルキメデスの原理等々）上山春平氏はそれを「普遍学」と名付け、さらに「地球学」「社会学」と数えて、「自我学」の範疇に説き至る<sup>①</sup>のである。自我学こそ、「汝自身を知れ」のソクラテスの姿勢をふまえ、さらに人間の文化を深層にして、「非常に主観的な、人生いかに生きるべきか」の問題までも掬い取る。ここにおいて、上述来の「仏道を習ふとは自己を習ふ也」云々の学問的根拠が明らかにせられたと見てよいであろう。

しかしながら、自己の膨張が自我（エゴイズム）にすぐ変じ得るということを知らねばならない。その自己中心主義の怪物は、今、かつてないほどの跳梁を見せているようだ。モンスターペアレンツ、DV、理由なき殺人、子殺し、親殺し、卑怯きわまるいじめ等々々。まさに「仏道とは自己を習ふ也。・・・自己を忘るとは万法に証せらるる也。・・・しかりと雖も草は棄嫌に生ふるのみ也。」<sup>②</sup>で、自己を修習している間にもいらぬ雑草は生えるのみなのである。

世人皆、これを何とかせねばと思っていようが、なかなか着手はされぬ。幾年か前、文部科学省の役人が「プロジェクトD」（Dは道徳の意であろう）を称すと見えた<sup>③</sup>が、結局は単なる思いつきに終わったようで、省内からかかるプロジェクトが展開された様子はない。そうこうしているうちに、ほんとうにたがが緩み切ってしまう日が来るに違いない。「倫理道徳は必要だが、心の教育でありたくない。」などと一日延ばしに延ばしているうちに、やがて心の「内省」など一片もなくなってしまう事態に陥りはしないか。

毒箭<sup>①</sup>の毒は少しずつ確実に我々の身心を蝕んでいく。かく正に毒矢に刺されているにも拘らず、その対処に取りかかることなく、相も変わらずその毒矢はどこから誰によって射られたか、その毒の成分は・・・などと閑葛藤にかかずらっている。そしてその間に毒箭の毒は確実に深く我々の心身を冒してゆく。この仏典のことは<sup>②</sup>が今更に痛烈に私の身心に沁み入ってくるのである。

注 ①『深層文化論序説』（上山春平）74頁・（普遍学・地球学・社会学・自我学）89頁

②『日本思想大系12・道元上』「現成公案」35頁

「…仏道もとより豊儉より跳出せるゆゑに、生滅あり生仏あり。しかもかくの如くなりといへども、花は愛惜にちり、草は棄嫌におふるのみなり。」

③ 平成15年度 モラロジー教育者研究大会の講演

④『仏教聖典』（東京大学仏教青年会編）37頁「箭喩経」

